

この数年目覚ましい活躍のドジャース・大谷翔平選手が、老若男女を問わず多くの人々に「ショーヘイ」と愛され、野球人気をいやが上にも盛り上げている。ついには競馬界に競走馬「オータニサーン」が登場するほどのノリである。

しかし、本来スポーツは、公平なルールに基づいて同じ条件の下でプレイすることを求められている。ところが、野球ばかりは必ずしもそうではない。最も大事なグラウンドの広さが一定せず、マチマチなのが最大の問題である。公平性に欠け、例えフェア・グラウンドの広さが同じであっても外野フェンスに高低差があるため不公平感が残る。フェンスが低ければ本塁打になるが、高ければ必ずしもそうはならない。また、ファウル・グラウンドの広さもバラバラなので、A球場ではファウル・フライでアウトになっても、B球場ではスタンドに入ってアウトにならないこともあり得る。

選手がプレイするグラウンドの広さにこれほど相違があり、不揃いが認められているスポーツは、全力疾走することもなく年齢を重ねてもプレイできるゴルフのような特殊なスポーツを除いて野球だけではないだろうか。グラウンドの条件が異なるために、球場によって打者なら本塁打数に、投手なら勝敗数とか、防御

率に影響してくる。

高校球児のメッカであり、昨年プロ野球日本一となった阪神タイガースの本拠地でもある阪神甲子園球場は、スタンドが広く大きいだけに、イメージ的にはグラウンドも広いと思われ勝ちだが、実際のホームベースと外野フェンス間の距離は、プロ 12 球団グラウンドの中でも狭い方である。フェンスの高さも 2.6m で、横浜スタジアムの 5.15m のほぼ半分である。意外にも他球場に比べてホームランが出やすいグラウンドなのである。

同じ条件の下にプレイするのがスポーツの基本であるべきだが、近代的スポーツと見られている野球が案外そうではなく、むしろ一番遅れているのである。それがヨーロッパなどで野球が、子どものころから国民的スポーツとして普及しなかった大きな原因ではないだろうか。

他にも野球界は相も変わらずルールなどすべての面で、野球発祥国・アメリカの大リーグ野球機構の決定に、多くの野球愛好国が従わされている前時代的な傾向がある。残念ながら、野球には合議制により民主的に決めるスポーツの潔さがあまり感じられない。そこに野球界に今も不公平さが野放しにされている原因がある。今後野球界のさらなる発展のためにも、現在の不正さをこれまで通り残したままで良いものだろうか。

エッセイスト 近藤節夫